

BIRD RESEARCH NEWS

2014年9月号 Vol. 11 No. 9

- 活動報告 オオタカが「希少種解除」?
- 学会情報 IOC & 日本鳥学会2014年度大会
- 活動報告 ヨタカはまだ意外に多く生息?
- お知らせ 調査研究支援プロジェクト プラン募集
- 生態図鑑 コガラ
- 参加募集 オリジナル調査Tシャツを作ろう!
- お知らせ 研究集会 in 2014 開催します!
- イベント情報 「どうする? どうなる! 外来生物」



Photo by Kazuto Kawakami

活動報告

オオタカの「希少種解除」が検討されています

植田睦之

オオタカは、過去2回のレッドリストの改訂で、連続で「絶滅危惧II類」から外れ、「準絶滅危惧」となりました。オオタカは種の保存法の「国内希少野生動植物種」に指定されていますが、絶滅危惧種から外れたことを受け、環境省はこの指定の解除について検討をはじめました。バードリサーチは環境省から委託を請け、日本オオタカネットワークとともにオオタカの個体数についての情報収集と希少種解除の問題点の検討を行ないました。

オオタカは増加後、近年はやや減少?

まず、オオタカを国内希少野生動植物種から外すことが、オオタカの個体数の動向からみて妥当なのかを検討するために、文献とアンケートにより情報収集を行ないました。その結果、多少の地域差はありますが、全国的にみるとオオタカは2000年代までは増加傾向にあり、その後は安定している

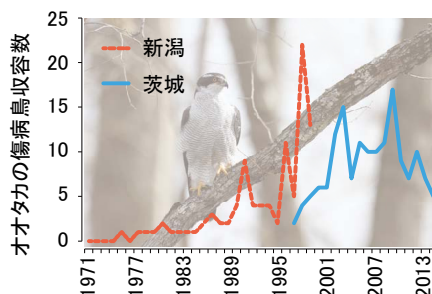


図. 新潟(風間ほか(1998), 愛鳥センター年報)と茨城(池野進未発表データ)のオオタカの傷病鳥収容数の変化。アンケートや文献情報に基づくオオタカの増減とよく一致している。

Photo by 藤井薫

るかやや減少傾向にあると推測されました。その状況をレッドリストの基準にあてはめると、やはりオオタカのランクは「準絶滅危惧」であり、この点からは、オオタカを国内希少野生動植物種から外すことは妥当といえます。

オオタカ希少種解除の問題点

しかし、オオタカの希少種解除にはいくつかの問題もあります。これまでオオタカの保護のためにその地域の里地の生物多様性が保全されてきた側面がありますが、指定解除によって開発事業等への規制が弱まり、地域の生物多様性に影響をあたえることが最も懸念されることです。そのため「猛禽類保護の進め方」(環境省)に記載されているような保全措置が今後も継続される必要があります。また、オオタカの密猟問題は以前と比べると最近はやや減少していますが、希少種解除により、はく製などの譲渡が可能になり、密猟の罰則も軽くなることで、再び密猟問題が生じることも危惧されます。鳥獣法により担保できる事項もあり、そのような枠組みの検討も必要です。さらに、オオタカの個体数は最近はやや減少している可能性があることから、指定解除後のオオタカの個体数や繁殖成績のモニタリング、減った場合の再指定のしくみの検討も必要でしょう。

こうした問題点について議論するために、立教大学でシンポジウム「オオタカ—希少種解除の課題—」が開催されます。この問題に興味のある方は是非ご参加ください。

シンポジウム

「オオタカ—希少種解除の課題—」

日時: 10月4日(土) 13:00~17:00

会場: 立教大学(池袋キャンパス)
11号館地下AB01教室

主催: 日本野鳥の会/日本オオタカネットワーク

共催: 環境省/立教大学

詳細・お申込み: 以下のホームページをご覧ください。メールかFAXにてお申し込みください。

<http://bit.ly/1rk5Snz>

学会情報

IOC&日本鳥学会2014年度大会

8月18～24日に国際鳥類学会議 (International Ornithological Congress: 以下IOC), 8月22～25日に日本鳥学会大会の両大会が、立教大学池袋キャンパスで開催されました。バードリサーチのスタッフも総出で参加してきました。

初の日本開催となったIOCには、世界中から研究者が集まりました。立教大学の動物生態学研究室をはじめ、事務局や実行委員会を担った皆さんの尽力、またたくさんの企業や団体の協賛によって、盛大な大会となりました。IOCでは日本からもたくさんの発表があり、その分日本鳥学会の口頭発表が少なかった印象ですが、ポスター発表は盛況で、活発な議論が交わされていました。

ここでは、普段あまり聞く機会のない海外の研究発表の中から、いくつかをご紹介します。**【高木憲太郎・笠原里恵】**

■26th IOCのホームページ

<http://ioc26.jp/>

■日本鳥学会2014年度大会のホームページ

<http://www2.rikkyo.ac.jp/grp/animal-ecology/osj2014/>

● 原発事故の野生生物への影響を測る

鳥類やその他の生物に放射線が及ぼす影響についてのシンポジウムは、黙とうから始まりました。最初の講演では、サウスカロライナ大学のティモシー・ムソー教授から、チェルノブイリと福島での原発事故以降に行われた調査と、得られた知見の概要が紹介されました。それによると、チェルノブイリの事故後、鳥たちに羽色の異常や白内障の症状が見られたり、無精子のオスの頻度が高くなるなど、様々な事象が観察されたそうです。このような異常は鳥以外の生物でも確認されています。次に、パリ第11大学のアンダー・メラーさんが、福島事故直後から毎年行ってきた鳥類センサスについて発表されました。調査の結果、空間線量の高い地域では、鳥類の種数や密度が減少する傾向があること、またヒヨドリやシジュウカラでは幼鳥の出現率が低くなることなどが分かってきているそうです。

IRSN (フランス放射線防護・原子力安全研究所)の松井晋さんとオードリー・ステルナルスキーさんからは、被曝量と種の生物学的特徴との関連についてお話がありました。生物が受ける総被曝量を推定するには、外部被曝と内部被曝を考える必要がありますが、松井さんによれば、樹上営巣種よりも地上営巣種で外部被曝量が多くなり、また放

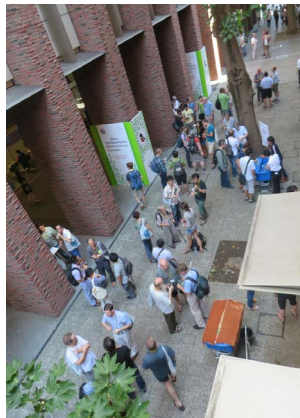


写真1. 国内外から多数の研究者が訪れました。

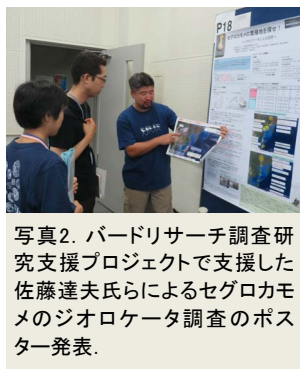


写真2. バードリサーチ調査研究支援プロジェクトで支援した佐藤達夫氏によるセグロカモメのジオロケータ調査のポスター発表。

射性物質を蓄積しやすい苔を巣材として用いる種も外部被曝量が多くなる可能性があるそうです。ステルナルスキーさんからは、外部被曝量と内部被曝量の関係についてお話があり、シジュウカラでは内部被曝量より外部被曝量の方が大きい可能性があること、そしてそれは苔を巣材としていることと関係しているかもしれないということでした。

生物が受ける総被曝量を数値として正確に把握し、種の生態学的特徴と照らし合わせる作業は、放射線の影響を考える上で不可欠であり、また観察によって得られた結果の意味を考えるための情報を提供します。原発事故の野生生物への影響を測るためには、こうした作業を続け、情報を蓄積していくことが必要なのだと感じました。

● 「群れ」で見る渡りの世界

日本での渡り鳥研究は、衛星追跡で個体を追う研究などが多いのですが、欧米では「群れ」を対象にした渡り研究も盛んです。いくつものセッションで渡りに関連する発表があり、膨大なバンディングの記録から小鳥たちの渡りの群れの生態を調べた研究から、群れの多数の個体に小型の発信機をつけ、海岸線に受信施設を一行に並べてどんなタイミングで海に飛び出しているのかを調べるというダイナミックな研究、またレーダーを使って群れの渡りを追跡したり、群れの鳥たちが風を利用して飛んでいることを調べたものなど、「群れ」を対象にした研究でも多くの成果が得られています。ラウンドテーブルでは、夜群れで飛ぶ鳥がなぜ鳴きながら飛ぶのかについて、声で互いの位置を確認しているのではないかなどと熱い議論が交わされました。こうした日本とは違う海外の研究の傾向が見られるのも国際学会の醍醐味といえるかもしれません。

● モニタリングデータを料理する

バードリサーチでは、会員の皆様のご協力により各種鳥類のモニタリングデータを集めています。「継続は力なり」ですが、ただ集めるだけではなく、分析を行ない、膨大なデータの中から意味ある結論をいくつも導き出していくためには、たくさんの頭脳とアイデアが必要です。

鳥類研究の先進国であるイギリスでは、BTO (British Trust for Ornithology) などのNGO団体が集めた情報を、大学の研究者が分析するという関係が築かれています。例えば、バーミンガム大学のアレクサンダー・ロワイヤンさんらは、BTOが集めたグレートブリテン島の河川を利用する鳥の存在データを用い、水量や流量とその変動が鳥に与える影響を分析しました。その結果、バンやコブハクチョウは最大水量が多い川に多いということや、カワセミは流量変動が大きい川に多いのに対しショウドウツバメは変動が小さい川に多いなど、種によって異なる傾向があることを明らかにしました。こうした情報は、気候変動によって河川の流況が変化した際に、どのような影響が鳥に出るのかを推測する材料にもなります。

一人で厨房に立っていても、多彩な料理は生み出せません。バードリサーチもBTOなどに負けず、多くの研究者たちと手を組んで、皆さまから提供される素晴らしい素材 (調査データ) をさまざまな料理に仕上げていきたいと思えます。

活動報告

ヨタカはまだ意外に多く生息？

—アンケート調査結果速報—

平野敏明

ヨタカは、1980年代以降、日本における生息分布が著しく減少しました。たとえば環境省の自然環境保全基礎調査では、日本地図をメッシュに区切り、メッシュごとの各種鳥類の分布状況を見ることができますが、1978年には生息確認メッシュが290あったのに対し、1997年から2002年の調査ではわずか124メッシュになってしまいました。現在、環境省のレッドリストでは、準絶滅危惧(NT)に選定されています。しかし、ヨタカは夕方から翌朝の薄暮時にかけて活動するため、詳しい生息状況を把握しにくい鳥です。そこで、ヨタカの生息状況を明らかにするために、バードリサーチでは、昨年から全国を対象としたアンケート調査を実施しています。2013年と2014年のアンケート調査から分かったことを簡単にご報告いたします。

アンケートでは、2年間で北海道から四国、九州地方までの28都道府県から合計49名によって178件の情報が提供されました(図)。特に、2014年は39

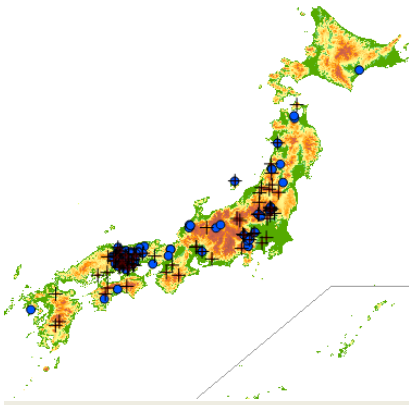


図. 調査地の分布 (●:2013年, +:2014年)

名と多くの方が参加して下さり、生息の有無だけでなく、近年の記録状況についてのコメントもいただきました。

お寄せいただいた178件の情報のうち、移動途中の記録や同一年の重複した記録3件を除くと、生息が確認された調査地は112か所、生息を確認できなかった調査地が63か所でした。今回の結果から、ヨタカは現在でも北海道から四国、九州まで広く生息していることが改めて確認されました。記録個体数は、約80%の報告では1羽や2羽でしたが、3羽が6.5%、4羽以上が4.6%でした。これらのことから、ヨタカは著しく減少したと言われるものの、まだ各地に多く生息していることが示唆されました。

ところで、我が国における最近のヨタカの分布を調査したものには、先述の自然環境保全基礎調査があります。2004年に発表された報告書(<http://urx.nu/coEd> (pdfが開きます))を見ると、山形県や高知県、岡山県などでは、環境省の調査で生息が確認されなかったメッシュでも、今回の調査では生息の報告をいただいているところがあります。たとえば山形県では、環境省の調査では岩手県との県境付近に生息メッシュが記録されていただけでしたが、今回は日本海側でも記録されました。環境省の現地調査は日中に行われており、夜行性のヨタカの記録は文献や調査者の知見に基づいています。とすると、ヨタカの生息分布は過少評価されているのかもしれませんが、やはり、詳しい生息状況を知るためには、実際に野外で調査することが不可欠と思われます。2年間の調査により112か所で調査が行われましたが、まったく情報がない県や地域がまだ多数あります。日本におけるヨタカの現状をより正確に把握するために、今後も引き続きご協力いただければ嬉しい限りです。末尾になりましたが、調査にご参加いただきました皆様にお礼申し上げます。

お知らせ

調査研究支援プロジェクト

調査・研究プランを募集しています！

高木憲太郎

あなたの調査・研究を支援します！！

鳥類の調査・研究に特化した支援プロジェクトです。個人や企業から寄付を集め、寄付者による投票によって支援額を決定します。皆さまからのご応募を、お待ちしております。

● 応募するには・・・

1. バードリサーチの会員になっている必要があります。
2. 予算書はなし。お金を何に使うかも問いません。
3. 調査・研究プランをA4用紙2枚にまとめて、バードリサーチに送ってください。様式はありません。一般の人にも分かりやすく、研究の面白さを伝えてください。この生態を明らかにしたい、こんなことがきっとわかる。それでOKです。詳細は募集要項をご覧ください。(10月31日締切)

● 支援先に採用されたら・・・

4. 支援額は1万円～数十万円。多くはないです。
5. 会計報告は、必要ありません。支援金は何に使っても構いません。調査研究に必要なものにお使いください。
6. 成果報告も分量は多くありません。A4用紙2枚以上。様式はありません。
7. バードリサーチの活動へのご協力(ニュースレターへの記事の執筆、研究集会での発表、調査への参加など)をお願いする場合があります。

原資は個人の方などからの寄付です。支援額は、寄付者による投票数で決まります。

募集要項は下記のどちらかをご覧ください。

PDF(423KB)

http://www.bird-research.jp/1_event/aid/BR-aid_plan.pdf

ホームページ

http://www.bird-research.jp/1_event/aid/index.html

コガラ 英:Willow Tit 学:Poecile montanus

1. 分類と形態

分類: スズメ目 シジュウカラ科

全長: 119-128mm 尾長: 55±1mm (53-58mm)
 露出嘴峰長: 10.1±0.1mm 心臓長: 18.5±0.6mm
 自然翼長: 61.5±1.5mm (58.1-64.4mm)
 平圧翼長: 63±2mm (61-67mm)
 体重: 11.3±0.5g (10.6-12.7g)
 *著者による計測値。

羽色:

雌雄同色。翼や尾は灰色、頭部は黒色、喉に黒斑がある。その他は白色～薄褐色。同じカラ類と混同されやすいが、ヒガラはコガラに比べると嘴下部の黒斑が大きく、冠羽があり、コガラよりも一回り小さい。シジュウカラは胸部～腹部を縦断するように黒い羽毛が生えており、コガラよりも大きい。



写真1. コガラ

鳴き声:

地鳴きはツツディーディー、ディーディー、ヒッヒッ、チッチなど。さえざりはヒーコーヒーコー。

2. 分布と生息環境

分布:

ユーラシア大陸の中緯度地方を横断するように分布。日本では離島を除く全国に留鳥として生息する。

生息環境:

北海道では平地に生息し、針葉樹林に多い。本州以南では低山帯から亜高山帯の森林に生息し、落葉広葉樹林、針葉樹林、針広混交林に多い。



写真2. コガラの生息環境。長野県軽井沢町にて撮影。

3. 生活史

繁殖システム:



一夫一妻で繁殖。ヒナへの給餌は雌雄ともに行う。繁殖期は5～7月頃。繁殖期には約1.2haのなわばりを構える。

巣:

地上1～6mほど、直径6～10cmほどの立ち枯れ木の幹や枝で営巣する。他のカラ類と違い、自力で樹に穴を掘って巣をつくる。

卵:

一腹卵数は5～9卵程度。サイズは長径16～17.5mm、短径12.5～13.5mm。白地に淡紫色や淡褐色の小斑がある。

抱卵・育雛期間:

抱卵期間は13～15日、育雛期間は約14～15日。巣立ち後1か月ほど両親の世話を受け、その後独立する。

非繁殖期:

冬には16.8～19.1haにおよぶ群れなわばりをもつ(中村・輪湖 1988)。群れは3～5羽の非血縁個体から構成される(Ekman & Askenmo 1984)。群れの境界ではしばしば直接的な攻撃を伴う争いが観察される。冬の群れのメンバーのなかから繁殖つがい形成されることが多い。

4. 食性と採餌行動

春～夏にかけてはチョウ目、ハチ目の昆虫の成虫や幼虫を食す。9月以降は種子食へと移行し、晩秋からは木の樹皮のすき間などに種子を貯食する。冬の間は主に秋に貯食した貯蔵餌を食べる。

5. 興味深い生態や行動、保護上の課題

● コガラが餌場で鳴く理由

コガラは秋から春にかけて、他のカラ類(シジュウカラ、ヤマガラなど)やゴジュウカラ、キツツキ類(コゲラやアカゲラ)とともに混群を形成します。混群は、森のなかの餌パッチを次から次へと移動していきませんが、よく観察していると、その動態には規則性があることに気づきます。コガラが先立って新しい餌パッチへと移動し、それにシジュウカラやゴジュウカラ、キツツキ類などが追従してゆくのです。庭先にヒマワリやアワをまき、混群の形成過程を観察することもできます。古くから、カラ類の混群においては、コガラのように体の小さな種が大きな種に追従されることで、受動的に群れが形成されると考えられてきました(Morse 1970)。

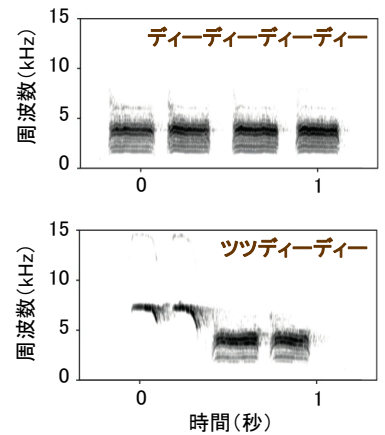


図1. コガラの2種類の鳴き声。餌をみつけたときに発する声(上)と群れの結束を維持するコンタクト・コール(下)。ともに4つの音素からなる。Suzuki (2012b)より改変。

私は、コガラが新しく餌場をみつけたときに興味深い行動をとることに気づきました。「ディーディーディーディー」と聞こえる特徴的な鳴き声を繰り返し発するのです(図1上)。餌資源の枯渇する冬場には、餌場を独占した方がいいように思えますが、その鳴き声は他個体に餌場の場所を教えているようにも聞こえます。それとも、威嚇のための鳴き声なのでしょうか?コガラが何のためにこのような鳴き声を発するのか、私はこの疑問の答えを見つけるために、2006年から2008年にかけて野外研究をおこないました。

まず、調査地の林内に餌皿を設置し、ヒマワリの種子を入れ、それを発見したコガラの行動を詳細に観察しました。計45回の観察をおこなったところ、コガラはヒマワリをみつけるといつでもディーディーと鳴くわけではないことがわかりました(Suzuki 2012a)。単独で餌をみつけたときには激しくディーディーと鳴きますが、他の群れのメンバーとともに餌場にやってきた場合は、ほとんど鳴き声を発しませんで

した(図2)。これらの観察から私は、「コガラは他個体に餌場をしらせるために鳴いている」と考えました。もし威嚇のために鳴いているのなら、他個体が餌場にいるときにより多く鳴き声を発すると考えられるからです。

そこで、このディーディーという鳴き声を餌のない場所でスピーカーから再生し、実際に鳴き声に鳥たちが引き寄せられるか確かめました。対照実験として、ツツディーディーという鳴き声(図1下)も再生しました。この声は、餌がない

状況でコガラが群れのメンバーとの連携を保つために発するコンタクト・コールです(Suzuki 2012b)。その結果、コガラのディーディーという鳴き声は、同種のみならず他種(シジュウカラやヤマガラ)も誘引する効果をもつことがわかりました。興味深いことに、この声に集まる種は、コガラとともに混群を形成する種のみでした。一方、ツツディーディーという声には鳥はほとんど集まりませんでした。つまり、彼らはコガラの鳴き声の微細な違い(ディーディーとツツディーディー)から餌の有無を判断し、スピーカーに近づいたと考えられます。

混群をつかって冬を乗り越えることは、コガラにとって利益があります。それは、他種の警戒声を手掛かりに猛禽類などの捕食者にいち早く気づいたり、うすめの効果で自身が攻撃される危険性を軽減できたりするからです。たとえ採餌効率が下がったとしても、一羽で餌を食べるよりは、複数で食べた方が安心なのかもしれません。これまで混群は、体の小さな劣位種が大きな優位種に追われることで受動的に形成されると考えられてきましたが、本研究から、劣位種であるコガラが鳴き声によって餌の存在をしらせることで能動的に混群の形成を促していることがわかりました。

● ユニークな鳴き声に含まれる複雑な情報

コガラ属の鳥類種は、その鳴き声が構造上、非常に複雑であることが知られています。アメリカ大陸北部に生息するアメリカコガラは、4種類の音素を組み合わせ、ひとつの鳴き声(チカディー・コール)をつくります。音素の組み合わせは変化に富み、膨大な数のユニークな鳴き声をつくることができます。コガラはこの鳴き声を、餌をみつけたときや捕食者に接近してモビング(追い払い行動)を行なう際など、さまざまな文脈で発します。彼らはこうした鳴き声を使い分けて、複雑な情報のやりとりをしているのかもしれませんが(Hailman *et al.* 1985)。

しかし、チカディー・コールが実際にどれほどの情報を他個体に伝えるのかということは、長年謎にまつまれている

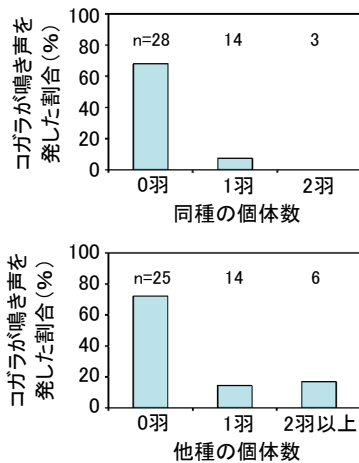


図2. 餌をみつけた後の30秒間でコガラ鳴き声(ディーディー)を発した割合。コガラが同種の群れのメンバー(上)や他種(下)とともに餌をみつけた場合、ほとんど鳴き声を発さなかった。Suzuki (2012a)より改変。

た。そこで、アメリカのモンタナ大学のTempletonら(2005)は、禽舎に入れたアメリカコガラに様々な大きさの捕食者を提示し、モビング時に発せられるチカディー・コールの変化を調べました。その結果、アメリカコガラは、危険度の高い(体の小さく小回りのきく)猛禽類を追い払う際は「チカディーディーディーディー…」と「ディー」の繰り返し数を多くして鳴き、危険度の低い(体の大きな)猛禽類にモビングする際は「チカディーディー」と「ディー」の繰り返し数を少なく鳴くことを発見しました。さらに、これらの鳴き声を捕食者の非存在下でスピーカーから再生したところ、アメリカコガラは、危険度の高い捕食者へのチカディー・コールを聞くと、より激しくモビングを行なうことが明らかになりました。つまり、アメリカコガラはチカディー・コールの「ディー」の繰り返し数を変化させることで、群れのメンバーに捕食者の危険度(大きさ)を伝えていたのです。同様の現象は、カロライナコガラ(Soard & Ritchison 2009)でも知られており、日本のコガラでもみつかるとも思われます。

6. 引用・参考文献

Ekman, J. B. & Askenmo, C. E. H. 1984. Social rank and habitat use in willow tit groups. *Anim. Behav.* 32: 508-514.
 Hailman, J. P., Ficken, M. S. & Ficken, R. W. 1985. The "chick-a-dee" calls of *Parus atricapillus*: A recombinant system of animal communication compared with written English. *Semiotica* 56:191-224.
 Morse, D. H. 1970. Ecological aspects of some mixed-species foraging flocks of birds. *Ecol. Monog.* 40:119-168.
 中村登流・中村雅彦. 1995. 原色日本野鳥生態図鑑<陸鳥編>. 保育社, 大阪.
 中村浩志・輪湖義治. 1988. コガラ*Parus montanus*の貯食行動. *山階鳥研報.* 20:21-36.
 Soard, C. M. & Ritchison, G. 2009. 'Chick-a-dee' calls of Carolina chickadees convey information about degree of threat posed by avian predators. *Anim. Behav.* 78:1447-1453.
 Suzuki, T. N. 2012a. Long-distance calling by the willow tit, *Poecile montanus*, facilitates formation of mixed-species foraging flocks. *Ethology* 118:10-16.
 Suzuki, T. N. 2012b. Calling at a food source: context-dependent variation in note composition of combinatorial calls in willow tits. *Ornithol. Sci.* 11:103-107.
 Templeton, C. N., Greene, E., & Davis, K. 2005. Allometry of alarm calls: Black-capped chickadees encode information about predator size. *Science* 308:1934-1937.

執筆者

鈴木俊貴 総合研究大学院大学 先導科学研究科

コガラの鳴き声の研究は、大学の卒業研究ではじめました。調査地である軽井沢の森は、冬場は日中でも氷点下。ぼくにとっては極限的な環境でした。マイクとスピーカーをリュックにつめて、双眼鏡と安い板チョコを手に鳥を追いかけていたものです。今は生活水準も向上して、車で調査地を移動し、アーモンド入りのチョコレートを食べるという快適な野外調査ができていますが、学生の頃のハングリー精神を忘れずに研究を続けていこうと心に誓う今日この頃です。



参加募集

オリジナル調査Tシャツを作ろう！

—Tシャツデザインチーム参加者募集—

高木憲太郎

皆さんは普段どんな服で調査をしていますか？寒い冬の調査ではそれぞれにいろいろな装備があると思いますが、夏は気軽なTシャツがいいですよね。僕は自分の調査対象の鳥がデザインされたTシャツが欲しいといつも思うのですが、なかなか気に入ったものには巡り会えません。きっと、僕みたいな人が他にもいっぱいいる！！そう信じて、新プロジェクトを立ち上げます。題して、Tシャツデザインプロジェクト！

プロジェクトの目的は、バードリサーチのオリジナルTシャツを作ること。それも、1つや2つではなく、いろいろなデザインのものを作りたいと考えています。そこで、バードリサーチTシャツデザインチームに参加して、一緒にデザインしてくれるボランティアを募集します。ちょっと自慢したくなるようなオリジナルTシャツを一緒に作りましょう！

バードリサーチのプロジェクトはみんなで楽しく、がモットーです。「デザインをするのは得意じゃないんだよね」という人は、「この鳥をデザインしたTシャツが欲しい！」などの希望やアイデア、プリントして欲しい写真などをメールで送ってください。デザインチームが総力を挙げてカタチにいたします！



デザインボランティアに参加して下さる方、デザインの提案をして下さる方は高木(takagi@bird-research.jp)まで

■□■□ オリジナルTシャツの購入方法 □□□■

このプロジェクトでは、iPhoneアプリ「PlatTii」を使用します。「PlatTii」をダウンロードすればアプリ上で注文でき、注文から2週間ほどでお手元に届きます。

本プロジェクト立ち上げにあたり、アプリ内に「バードリサーチの部屋」を設けていただきました。画面左上「その他作品」の「カルチャーの部屋」というカテゴリがあるので、ぜひ見に来て下さい。現在3つのデザインを販売していますが、今後追加していく予定です。

現在はiPhone、iPadなどをお持ちでないと、購入することができません(Android版も鋭意開発中とのこと)。ネット販売や、研究会などでの直接販売も検討しています。

★Tシャツの色は以下から選べます。

- 2,980円
- 3,780円 (いずれも送料・税込)



図. PlatTiiの画面。

iPhoneアプリ「PlatTii」のご紹介

iPhoneだけでTシャツのデザインの編集からアップロードまででき、1枚から気軽に購入できるアプリ、それが「PlatTii」。作ったデザインをアプリから直接FacebookなどのSNSに投稿することもできます。このアプリを開発したのは、株式会社バートルヒクマというIT企業。バードリサーチ設立当初から、調査結果の集計システムを開発していただいたり、最近では調査研究支援プロジェクトにもご支援いただいています。

将来的にはTシャツだけでなくマグカップやトートバッグのデザインもできるようにしたいとのこと。バードリサーチオリジナルマグカップができる日も近い！？

PlatTii ~自分だけのTシャツを作って購入・販売できるアプリ~
<http://urx.nu/coAE>

お知らせ

研究会2014 in大阪 開催します！

バードリサーチでは、会員の集いとして、毎年研究会を開いています。今年は大阪市立自然史博物館で開催します。バードリサーチからの活動報告のほか、例年、鳴き声の録音調査やレーダー調査などテーマに沿った講演会やエクスカージョンを実施してきましたが、今年はよりみなさんの交流を深めてもらうため、フクロウ、ツバメ、識別に関する3つのグループ集いを企画しました。ひとつひとつの集会の人数は少なくなりますが、よりアットホームな雰囲気を楽しんでもらえたらと思っています。

また、今回はポスター発表も予定しており、現在発表者を募集しています。ご自身の調査結果を発表して下さる方は神山(koyama@bird-research.jp)までご連絡ください！

研究会には当日参加もできますが、だいたいの人数を把握するため事前申し込みにご協力いただくと助かりま

す。事前申し込みされた場合でも、参加するグループ集いを当日変更することは可能です。

日時：
 研究会 2014年11月29日(土) 13:00 ~ 17:00
 懇親会 18:00~20:00(事前にお申し込み下さい)

会場：
 大阪市立自然史博物館
 〒546-0034 大阪市東住吉区長居公園1-2

プログラム：
 13:00~13:30 バードリサーチの活動報告
 13:30~16:00 グループ集い
 16:00~17:00 ポスター発表(発表者募集中)
 18:00~20:00 懇親会

研究会の詳細、参加申し込みはこちらをご覧ください。
<http://urx.nu/cs6i>

イベント情報

特別展「どうする？どうなる！外来生物」 ～カナダガンの事例～

神奈川県立生命の星・地球博物館 加藤ゆき

外来生物とは

ガビチョウ、カオグロガビチョウ、カオジロガビチョウ、ソウシチョウ。これらは、2005年に施行された「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律(通称:外来生物法)」により、特定外来生物に指定されている鳥類です。今年8月には、新たにカナダガンが加わりました(写真1)。



写真1. 山梨県河口湖の鶺ノ島で抱卵するカナダガンのメス。追跡用の首環をつけている。

外来生物とは、「人間によって生息域外から導入された生物」のことを指します。私たち日本人の主食であるお米(イネ)も、動物園にいる動物たちも、本来の生息域を遠く離れて持ち込まれたものです。これらが農耕地や飼育施設などで管理されているうちは問題は起きません。しかし、近年は管理下から野外に出て定着した外来生物が数多く報告されるようになり、各地で様々な問題が起きています。外来生物が引き起こす問題とその対策について、カナダガンの事例をご紹介します。

カナダガンの生息状況と対策

北米原産のカナダガンは、1970年頃から動物園などでの展示目的で飼育されるようになりました。野外では、1985年に初めて静岡県富士宮市で2羽が確認され、同年から繁殖し、少しずつ数を増やして、2010年には神奈川県や静岡県、山梨県などの湖沼でまとまった羽数が確認されるま

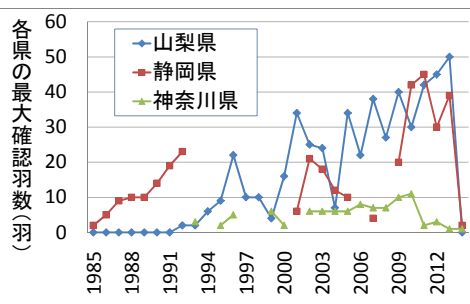


図1. 富士山周辺におけるカナダガンの観察個体数の変遷。カナダガン調査グループによる観察記録や個人の野鳥観察ホームページ等を参考に作成。

でになりました(図1)。日本に自然に渡来する可能性は低く、国内の飼育施設から逃げ出したと考えられています。2011年から行なわれてきたカナダガン調査グ

ループの調査により、主な生息地は山梨県河口湖・山中湖と静岡県田貫湖およびその周辺地域で、それぞれ約50羽が生息することや、農作物や牧草への食害とキャンプ場での糞害が発生していることが明らかとなりました。

本種の増殖率は高く、例えばニュージーランドでは、1905年に50羽ほどが導入され、狩猟対象であるにもかかわらず100年で6万羽にまで増えました。イギリスなどでも同様の傾向が見られ、草地での過食や水草への食害、水際の土壌流出などが問題となっています。

日本でも、このまま放置すれば生息数は増加し、それに伴い群れが各地に拡散し、さまざまな被害が起きることは容易に想像できます。そのため、山梨県富士河口湖町および静岡県富士宮市は有害駆除の実施を決め、調査グループの協力を得て擬卵交換による繁殖抑制や生体捕獲をすすめたところ、2014年8月現在の日本での推定生息数は7羽となりました。早期対策が功を奏したのでしょうか。

どうする？どうなる！外来生物

しかし、このように順調に対策が進む事例はまれです。北米原産のアライグマは、現在すべての都道府県に生息するまでになり、各地で対策が講じられていますが、なかなか終わりが見えてきません。2011年に世界自然遺産に登録された小笠原諸島は、固有種の宝庫として有名ですが、一方で深刻な外来生物問題を抱えています。

神奈川県立生命の星・地球博物館では、特別展「どうする？どうなる！外来生物」を11月3日まで開催しています(写真2)。展示では、前述のカナダガンの事例だけではなく、哺乳類から植物まで、あらゆる環境に生息する外来生物を紹介する



写真2. 特別展「どうする？どうなる！外来生物」の様子。

とともに、オオクチバスやアメリカザリガニなど、各地で取り組まれている対策も取り上げています。子ども向けの解説パネルや体験コーナーも設け、大人も子どもも楽しめる内容になっています。10月18日には、琵琶湖での外来魚対策や各地でのウシガエル対策、チュウゴクオオサンショウウオとの交雑により種の存続が危ぶまれる特別天然記念物オオサンショウウオの保全について、実際に活動されている方々からお話いただく講演会「外来生物対策の現場から」も予定されています。

このような展示や講演会を通して、外来生物が引き起こす自然への影響を知り、何が問題で、解決に向けて何をすべきなのかについて考えていただきたいと思います。

バードリサーチニュース 2014年9月号 Vol.11 No.9

2014年9月30日発行

発行元: 特定非営利活動法人 バードリサーチ
〒183-0034 東京都府中市住吉町1-29-9
TEL & FAX 042-401-8661
E-mail: br@bird-research.jp URL: <http://www.bird-research.jp>

発行者: 植田睦之 編集者: 青山夕貴子・高木憲太郎

表紙の写真: カツオドリ